



CNCF アニュアルクラウド ネイティブサーベイ

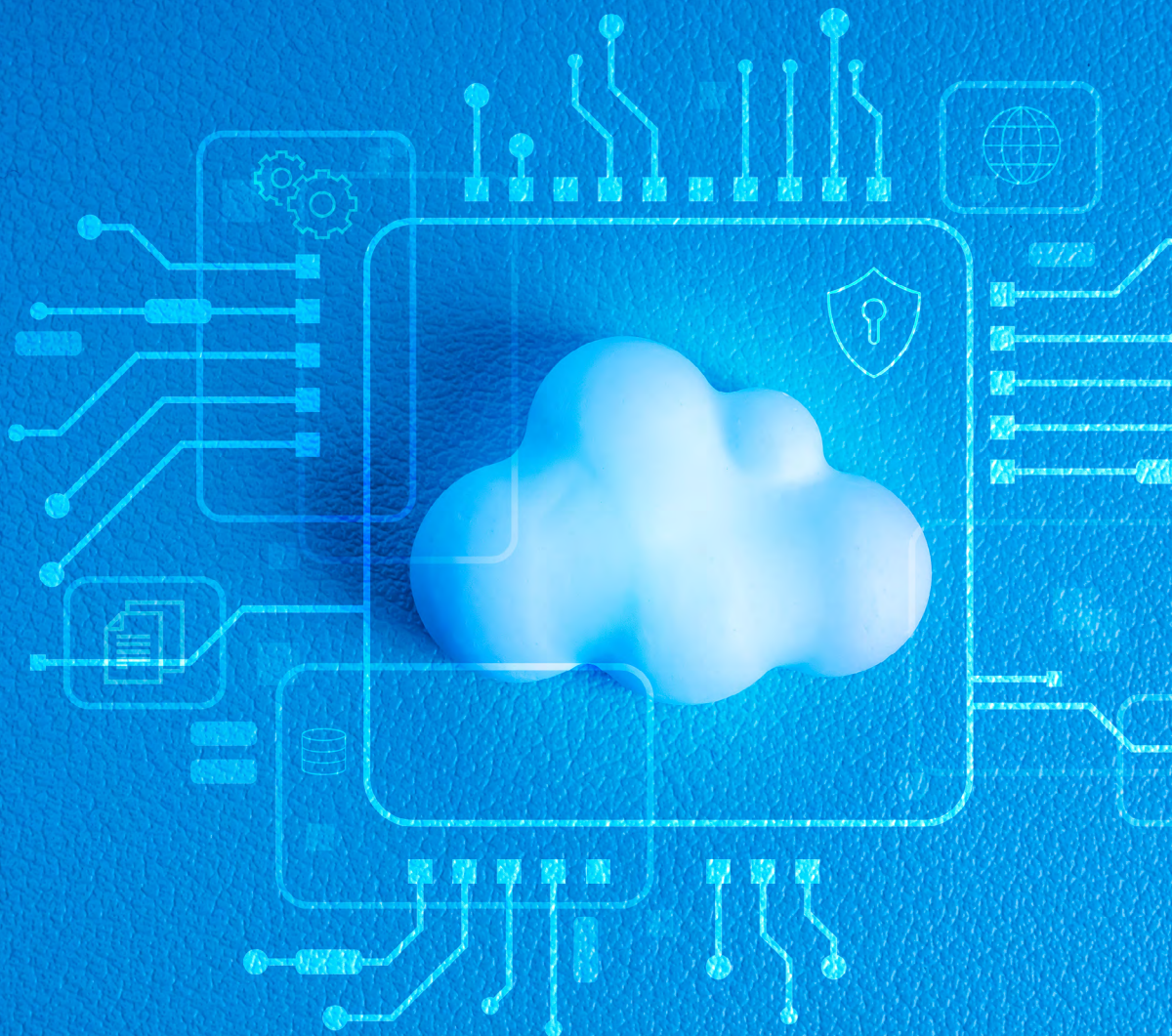
AIの未来の
インフラストラクチャー

Adrienn Lawson, *The Linux Foundation*

Jeffrey Sica, *Cloud Native Computing Foundation (CNCF)*

Foreword by Jonathan Bryce, Executive Director, Cloud and Infrastructure, *The Linux Foundation*


January 2026



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ: AIの未来のインフラストラクチャー


CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

組織の66%が生成AIワークロードのホスティングにKubernetesを使用しています。




CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

コンテナユーザーの82%が本番環境にKubernetesを導入しており、2023年の66%から増加しました。




CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

調査対象組織全体で、クラウドネイティブの採用率は98%に達しています。




CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

コンテナ導入における最大の課題として、開発チームの文化的変革が第1位(47%)に挙げられ、技術的な課題を上回りました。



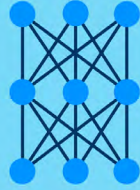
CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

本番アプリケーションにおけるコンテナの使用率は、2023年の41%から2025年には56%に増加しました。



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

組織の47%がAIモデルを不定期にデプロイしており、毎日デプロイしている組織はわずか7%にとどまります。



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

組織の52%は自社でAIモデルの構築やトレーニングを行っておらず、既存モデルの利用者にとどまっています。



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

GitOpsの採用率は、クラウドネイティブエクスプローラーでは0%であるのに対し、クラウドネイティブイノベーターでは58%に達しています。




CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

成熟した組織におけるCI/CDの採用率は91%に達しており、最も基本的なプラクティスとなっています。



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

クラウドネイティブイノベーターの74%が1日に複数回コードをコミットしているのに対し、クラウドネイティブエクスプローラーでは35%にとどまります。




CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

組織の59%がクラウドネイティブを開発の大部分またはほぼ全体に活用しており、2023年の54%から増加しました。



CNCF アニュアル クラウド ネイティブ サーベイ

マシン駆動の自動化による利用拡大に伴い、インフラストラクチャーの持続可能性が重要な課題として浮上しています。



Contents

- Foreword4**
- Executive summary5**
- Introduction.....5**
- Kubernetes as the AI platform6**
- The maturity of cloud native infrastructure9**
- Cloud native maturity profiles13**
- CNCF Projects18**
- Conclusion20**
- Methodology.....21**
- About the authors26**
- Acknowledgments26**

Foreword

今年、Cloud Native Computing Foundationは設立10周年を迎えます。10年前、現在では業界標準とみなされている概念は、革新的なビジョンでした。今日、それらは現代のソフトウェア システムの揺るぎない基盤となっています。

今年という記念すべき年の途中に、Executive Directorの役職を引き受けることができ、光栄に思います。本レポートの調査結果は、クラウドネイティブが真に普及したことを裏付けています。組織の98%がクラウドネイティブの技術を採用しており、本番環境でのKubernetesの利用はコンテナ ユーザーの間で82%にまで急増しています。

このような成熟は、コミュニティの次なる大きな機会を明らかにしました。クラウドネイティブにおける主な課題はもはや技術的な複雑さではなく、組織の47%が「開発チームにおける文化的な変革」を最大の障壁として挙げています。これこそが、プラットフォームエンジニアリングが生まれた背景です。コミュニティはこの取り組みをけん引し、複雑さを抑えて開発者の生産性を引き出す標準的なプラットフォームを構築しています。これは、GitOpsの採用をはじめとするさまざまなプラクティスにも表れています。業界を問わず、チームはコードから本番環境までの道筋を、整備された経路、適切なデフォルト設定、明確なガードレールによって体系化しています。その成果として、開発者は差別化につながらない繰り返し作業から解放され、ビジネスにとってはより迅速で安全なデリバリーが実現します。

この安定したプラットフォーム中心の基盤は、業界全体に影響を与える次の大きな変革、すなわち人工知能(AI)も可能にしています。

本レポートのタイトルは「AIの未来のインフラストラクチャー」であり、そのデータは新たな基盤を明らかにしています。組織の66%がすでに生成AIワークロードのホスティングにKubernetesを使用しています。しかし、真の注目点は話題になっていることで語られるものではありません。LLMのトレーニングではないのです。ほとんどの企業は自社でモデルを構築したりトレーニングしたりせず、利用者側にいます。真の課題はデプロイメントであり、野心と現実の間のギャップは歴然としています。

チャットボットやエージェントの誇大宣伝を切り抜けて冷静に見れば、AIワークロードの運用難易度を大幅に下げつつ、業界全体で推論キャパシティを大規模に拡大していく必要があることは明白です。これこそが次の大きなクラウドネイティブ ワークロードだと考えます。私たちのコミュニティは、モデルの実行、スケーリング、そして観測に関する経験と専門知識を持っており、グローバルなイノベーションを可能にする技術とプラクティスをオープンに共有しながら、その役割を果たせます。

このAIという新たな波は、新たな責任ももたらします。本レポートが警告するように、「機械主導の自動化された利用」は、私たちが依存しているオープンソース システムに負荷をかけます。次の10年は、イノベーションだけでなく、素晴らしい貢献者たちを継続的に支援し、コミュニティを発展させていくことによって定義されなければなりません。

今年、コード、ドキュメント、テスト、体験談、そしてサポートに貢献してくださったすべての方々に感謝します。CNCFに初めて参加される方は、ようこそ。困難な問題を共有の解決策へと変えていくコミュニティがここにいます。創設当初からともに歩んでこられた方々には、私たちが今も強化し続けている基盤を築いてくださったことへの感謝を伝えたいと思います。

ともに、クラウドネイティブの次の10年へ。

JONATHAN BRYCE,
Executive Director, Cloud and Infrastructure, The
Linux Foundation

Executive summary

2025年版CNCFアニュアル レポートは、クラウドネイティブ エコシステムが重要な変曲点に達したことを明らかにしています。実験的なアーキテクチャ アプローチとして始まったものが、エンタープライズ インフラストラクチャーの標準として確立され、現在では組織の98%がクラウドネイティブの技術を採用しています。しかし、もはや焦点は技術の採用にはありません。成熟度、持続可能性、そしてAIのハイブ サイクルの陰で静かに起きている変革についてです。

2025年を定義する3つの主要テーマがあります。

第1に、Kubernetesはコンテナ オーケストレーターからAIインフラストラクチャー プラットフォームへと進化しており、組織の66%が生成AIワークロードをその上で実行しています。主な障壁は技術的な複雑さから組織の変革へと移行しており、文化的な抵抗が47%で最大の課題となっています。オープンソースインフラストラクチャーの持続可能性は、実存的な懸念として浮上しています。機械主導の自動化された利用が、ソフトウェアのビルド、テスト、デプロイ、配布を支える重要なシステムに負荷をかけているためです。

Introduction

クラウドネイティブ技術は、現代のエンタープライズ インフラストラクチャーの根幹となっています。組織がAIワークロードをデプロイし、アプリケーションを近代化し、運用の俊敏性を追求するなかで、実際の採用パターンと実装プラクティスを把握することは、適切な意思決定に不可欠です。

本レポートは、コンテナ、Kubernetes、およびクラウドネイティブの採用動向に関する組織の見解を調査した2025年版CNCFアニュアル サーベイの結果をまとめたものです。このサーベイは、2025年9月に複数の業界、企業規模、地域にわたる628人の回答者からデータを収集しました。年次調査として、本サーベイは技術の採用と成熟度を年単位で追跡することを可能にし、現在のプラクティスだけでなく、クラウドネイティブ エコシステムの方向性と進化も明らかにしています。

第2に、データはクラウドネイティブの成熟度が予測可能な進行モデルをたどることを示しています。組織はエクスプローラー、アダプター、プラクティショナー、イノベーターという4つの異なるステージを経て進歩します。各ステージは、特定の技術採用パターンと開発速度によって特徴付けられます。GitOpsは北極星となる指標として機能しており、エクスプローラーの中でGitOpsを導入している組織は1つもない一方、イノベーターの58%がGitOps準拠のデプロイメントを運用しています。

第3に、本レポートはAIの野心とインフラストラクチャーの現実との間に大きなギャップがあることを明らかにしています。注目はモデルの革新に集中していますが、組織の47%はAIモデルをごくまれにしかデプロイしておらず、52%はモデルのトレーニングをまったく行っていません。真の競争優位性はアルゴリズムではなく、堅牢なCI/CDパイプラインやリソース最適化といった、目立たないインフラストラクチャーの能力にあります。

Cloud Native Computing Foundation(CNCF)のエコシステムは現在、さまざまな成熟段階にある234のプロジェクトで構成されており、世界中の270,000人以上の貢献者によって支えられています。本レポートは、クラウドネイティブ全体にわたる採用パターン、デプロイメントのプラクティス、および新たなトレンドを分析し、組織が自社のクラウドネイティブの成熟度と戦略を評価するためのベンチマーク データを提供します。

Kubernetes as the AI platform

AIの革新が大きく報じられるなか、インフラストラクチャー層ではより静かな変革が進んでいます。CNCFのサーベイ データによると、組織の66%が生成AIワークロードの実行にKubernetesを活用しています。しかし、成功するかどうかはリソース管理とデプロイメント パイプラインという地味な課題を克服できるかにかかっています。

事実上のAIプラットフォームとしてKubernetesが台頭していることは、組織が機械学習の運用に取り組む方法の根本的な変化を示しています。従来のMLインフラストラクチャーは、データサイエンス チームと本番エンジニアリングの間にサイロを生み出す、特化した一枚岩のプラットフォームに依存することが多くありました。Kubernetesは、従来のアプリケーション ワークロードとコンピューティング集約型のAIタスクの両方を処理する統合されたオーケストレーション レイヤーを提供することで、このギャップを埋めます。KubeflowはエンドツーエンドのMLワークフローを提供し、KServeはモデルの大規模なサービングを担います。GPUスケジューリング機能、ノード アフィニティ ルール、および高度なリソース クォータ管理の導入により、組織は高価なハードウェア リソースを複数のチームやワークロードにわたって効率的に共有できるようになっています。

Kubernetes AI adoption wave

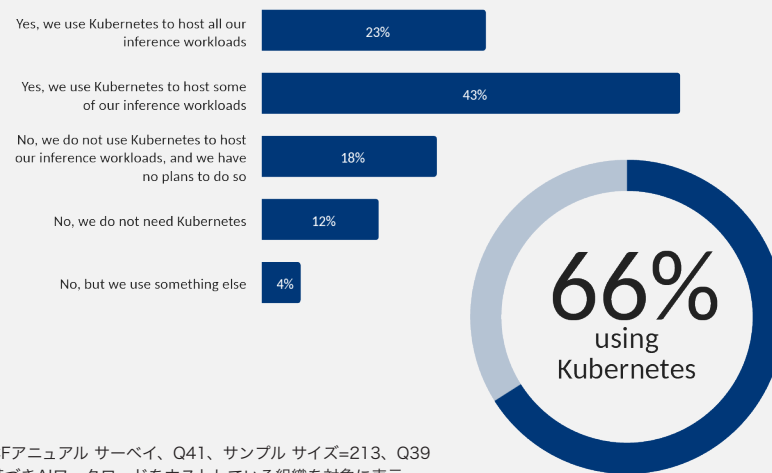
図1に示すように、KubernetesはプロダクションAIの事実上のオーケストレーション レイヤーとなっていますが、完全採用(23%)と部分採用(43%)の差は、組織がインフラストラクチャーを優先した慎重なアプローチを取っていることを示しています。

推論ワークロードにKubernetesを完全採用している23%は、真のMLOpsの成熟度を達成した組織を表しています。これらのチームはおそらく、モデルのデプロイメントにGitOpsワークフローを導入し、PrometheusとGrafanaによるモデルのパフォーマンス指標の堅牢な監視を確立し、AIワークロードを既存のCI/CDパイプラインに統合していると考えられます。

部分採用の43%のグループは、多くの場合バッチ推論ジョブや開発・ステージング環境など特定のユースケースからKubernetesを使い始めながら、本番環境のサービングには既存のレガシー システムを維持しています。Kubernetesの採用を計画している18%は、独自のMLプラットフォームへの既存の投資、運用上の複雑さへの懸念、またはチームの再教育の必要性といった障壁に直面している可能性があります。

AIワークロードをKubernetesに移行することは、単なるコンテナ化にとどまりません。組織は、コンテナレジストリやオブジェクトストレージを通じた大規模なモデル アーティファクトの管理など、固有の要件に対応する必要があります。また、GPUアフィニティを持つ適切なリソースを備えたノードにモデルが配置されるよう確保すること、トレーニング パイプラインと低レイテンシーのサービングとで異なるパターンを設計すること、そしてMLモデルに特化したカナリア デプロイメントとロールバック戦略を実装することも求められます。

図 1
AIワークロードのホスティングにおけるKubernetesの利用状況
生成AIワークロードのホスティングに
Kubernetesを使用していますか？(1つ選択)



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q41、サンプル サイズ=213、Q39 およびQ40に基づきAIワークロードをホストしている組織を対象に表示、DKNS除外

Most organizations are consumers of AI

図2における推論ホスティングとトレーニングの対比は、重要な実態を示しています。ほとんどの組織はAIモデルの生産者ではなく、利用者です。調査対象の組織の52%はAIモデルの構築やトレーニングを行っておらず、行っている組織もゼロから構築するのではなく、自社データをもとにファインチューニングしている可能性が高いです。これは、推論ワークロードがスケーラビリティとコスト最適化に異なる戦略を必要とするため、インフラストラクチャーのニーズに影響を与えます。

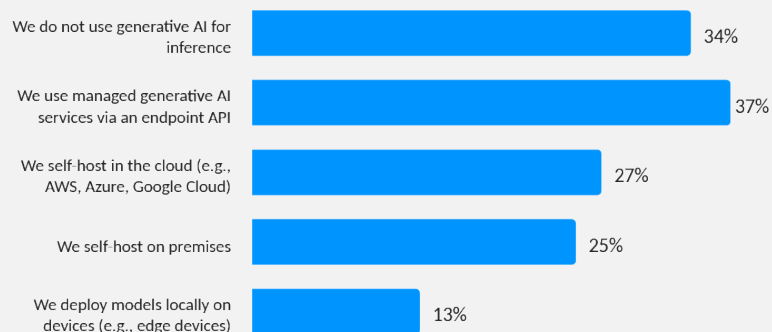
事前学習済みモデルを利用する組織は、独自のインフラストラクチャー上の課題に直面しています。主な焦点は、モデルの量子化、ONNXランタイムの最適化、バッチ処理戦略などの技術を通じた推論の最適化へと移ります。トレーニングは高価なGPUを数時間から数日にわたって必要とする一方、推論は継続的に実行されるため、コスト管理が重要になります。組織は高度なオートスケーリングポリシーを実装しており、要求の少ないワークロードにはCPUベース

の推論を活用し、レイテンシーに敏感なアプリケーションにはGPUリソースを確保するといった使い分けをしています。

マネージドAPIを使用している37%は、インフラストラクチャーの制御よりも市場投入速度を優先している組織を表しています。しかし、これらのチームでさえ、Kubernetesベースのオーケストレーションレイヤーから恩恵を受けられます。このレイヤーは、複数のプロバイダーにわたるリトライロジックとフォールバック戦略の実装、APIコスト削減のための一般的なレスポンスのキャッシュ、統一されたインターフェイスによるプロバイダー固有のAPIの抽象化、そして異なるサービス間での利用状況とコストの監視を可能にします。モデルをセルフホスティングしている25%は、所有コストがインフラストラクチャーへの投資を正当化するという経済的な判断を下しています。これは一般的に、月間リクエスト数が100万推論を超える場合、データプライバシーに関する規制によりクラウドAPIの利用が禁止されている場合、またはレイテンシーの要件がローカルデプロイメントを必要とする場合に合理的な選択となります。さらにローカルなレベルでは、エッジデプロイメント(13%)が特化したオーケストレーションを必要とする新たなパターンとして台頭しています。

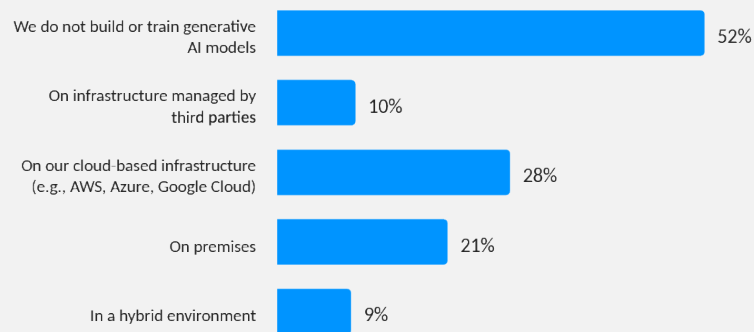
図2 AIホスティング

あなたの組織では、生成AIモデルを**推論**用にホストしていますか？
ホストしている場合、その場所を教えてください (該当するものをすべて選択)



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q39、サンプル サイズ=497、DKNS除外

あなたの組織では、生成AIモデルの**構築・学習**用にホストしていますか？
ホストしている場合、その場所を教えてください (該当するものをすべて選択)



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q40、サンプル サイズ=482、DKNS除外

Deployment maturity

デプロイメント頻度のデータは現実を示しています(図3)。47%が年に数回程度デプロイしており、毎日デプロイしているのはわずか7%です。AIの革新は着実に進んでいます。それは堅牢なCI/CD、監視、およびガバナンス インフラストラクチャーを必要とする、プロダクショングレードのデプロイメントです。

ユニットテストや統合テストによって品質を担保できる従来のコードとは異なり、AIモデルはホールドアウト データセットでのモデルのパフォーマンステストをはじめとする複雑なテストを通じた統計的な検証を必要とします。こうした検証ゲートはデプロイメントの速度を低下させますが、本番環境の信頼性には不可欠です。

毎日のAIデプロイメントを実現しているわずか7%の少数派は、新しいデータを継続的に取り込む自動再トレーニング パイプラインを実装していると考えられます。これらの組織は、モデルを静的なアーティファクトではなく、継続的な更新を必要とする生きたシステムとして扱っています。残りの93%の組織は、この状態にはほど遠いのが現状です。

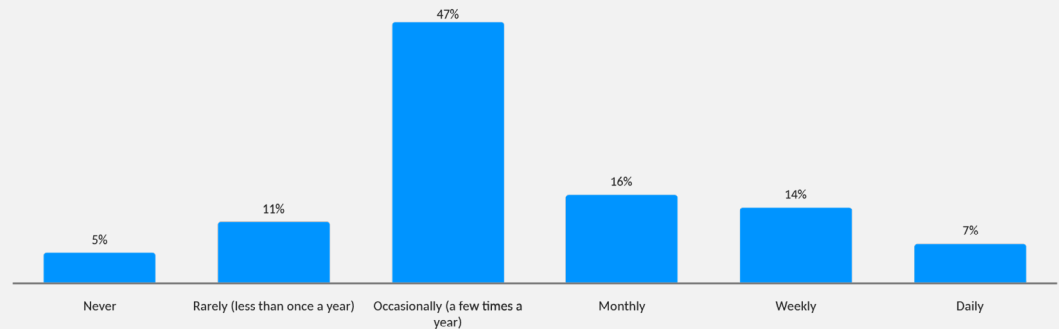
Diversity in AI workloads

Kubernetes上でAI/MLワークロードを実行している組織の間では、誇大宣伝を超えたユースケースの多様性があります(図4)。AIやMLの実際の採用は、バズワードであるだけでなく、現実のインフラストラクチャー上の課題への対応です。

図3

生成AIモデルのデプロイメント頻度

あなたの組織では、どのくらいの頻度で生成AIモデルを本番環境にデプロイしていますか？(1つ選択)

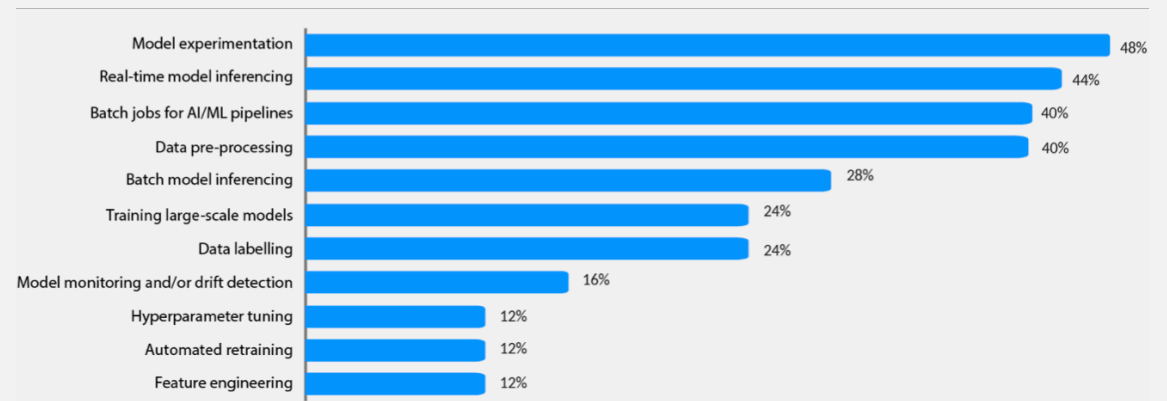


2025年版CNCFアニュアル サurvey、Q42、サンプル サイズ=183、DKNS除外

図4

AI/MLワークロードの種類

Kubernetes上でAI/MLワークロードを実行していますか？実行している場合、どのような種類のタスクやワークロードですか？(すべて選択)



2025年版CNCFアニュアル サurvey、Q29、サンプル サイズ=81、Q9、Q10およびQ23に基づきKubernetesを使用しているエンドユーザー組織を対象に表示、DKNSおよびNA除外

Infrastructure-first approach

AIで成功している組織は、最良のモデルを持つ組織だけではありません。これらのワークロードを確実にデプロイおよびスケールできるインフラストラクチャーの成熟度を持つ組織です。Kubernetesが基盤として台頭していますが、成功するにはAI/MLを単なるアルゴリズムの課題としてではなく、インフラストラクチャー上の第一級の課題として扱うことが必要です。

組織がAIワークロードのデプロイを急ぐなか、2025年9月にオープンソースインフラストラクチャーの管理者たちから厳しい警告を含む[オープンレター](#)が発表されました。重要なシステムは「危険なほど脆弱な前提」のもとで運用されており、利用状況に見合った持続可能な資金調達モデルではなく、善意に依存しているというものです。オープンレターが「機械主導の、しばしば無駄の

The maturity of cloud native infrastructure

複数年にわたるCNCFのサーベイ データは、クラウドネイティブの採用が実験的な段階から標準へと成熟し、Kubernetesがインフラストラクチャーとして定着し、最大のボトルネックは技術ではなく組織の変革と変化する規制環境にある可能性があることを示しています。

2023年から2025年にかけて、クラウドネイティブの状況は変化しました。かつては先進的なアーキテクチャの選択であったものが今や当然の前提となり、組織の98%が少なくとも何らかの形でクラウドネイティブの技術を利用しており、初期段階の採用はわずか8%にまで低下しています。本番アプリケーションにおけるコンテナの利用は41%から56%に増加し、Kubernetesはコンテナ化された環境の82%で稼働する事実上のオーケストレーション プラットフォームとしての地位を確固たるものにしました。

Cloud native adoption is still high

広範な利用(開発およびデプロイメントの「多く」または「ほぼすべて」)を報告している組織は、[2023年](#)の54%から[2024年](#)の60%へと増加し、2025年は59%で推移しています(図5)。一方、クラウドネイティブ技術を使い始めたばかり、またはまだ利用していない組織は、2023年の13%から2025年にはわずか10%にまで減少しており、この技術が初期採用の段階をとうに超えたことを示しています。

多い自動化された利用」の要因として明示的に指摘しているAI/MLワークロードにとって、この持続可能性の課題は深刻です。

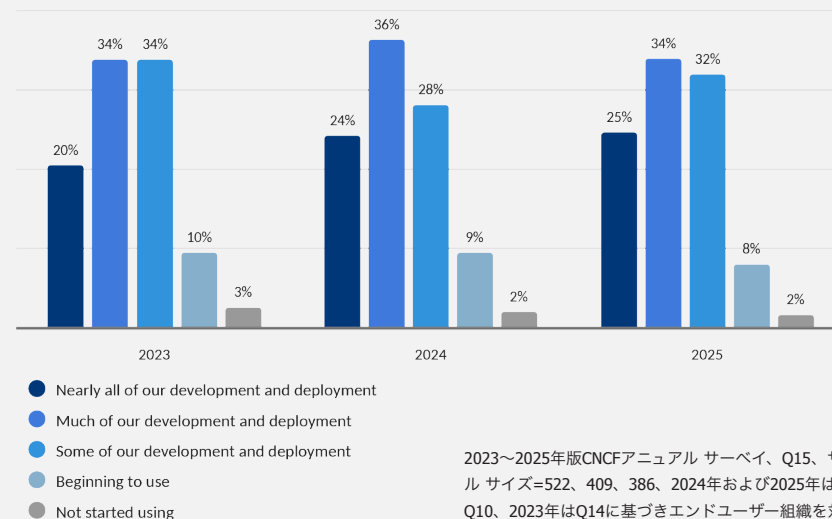
オープンレターの著者たちは、「商業規模のワークロードは、キャッシュやスロットリングもなく、自らが与える負荷への認識すらないまま実行されることが多い」と指摘しています。これはAIワークロードに完全に当てはまる説明です。ごくまれにモデルをデプロイしている組織(回答者の47%)は、インフラストラクチャーへの影響は最小限だと思い込んでいるかもしれませんが、しかし、それでもインフラストラクチャーに過大な負荷がかかっています。

AIの前進には、インフラストラクチャーを優先したアプローチが必要です。これは、キャッシュ戦略の実装、リソース クォータの活用、消費量の監視、そしてAIワークロードを可能にするオープンソース プロジェクトへの貢献を意味します。CNCFのエコシステムは持続可能なオーケストレーションのためのツールを提供していますが、組織が意図を持って活用する場合に限られます。

図5

クラウドネイティブの採用状況

あなたの組織はどの程度クラウドネイティブの技術を採用していますか？(1つ選択)



2023~2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q15、サンプルサイズ=522、409、386、2024年および2025年はQ9とQ10、2023年はQ14に基づきエンドユーザー組織を対象に表示、DKNS除外

Container usage steadily increasing

本番アプリケーションの大部分またはすべてにコンテナを使用している割合は、2023年の41%から2025年の56%へと増加しました(図6)。コンテナを試験運用中の組織は11%からわずか6%に減少しています。この2年間で増加は大きな進歩を示しており、Dockerとcontainerdによるランタイムの信頼性、イメージレジストリによる安全なストレージ、そしてセキュリティスキャンツールによる脆弱性の特定といったコンテナツールの成熟を反映しています。

組織は判断を下しています。コンテナが自社のニーズに合うと判断すれば本番環境へ移行し、合わなければ試験運用を中止します。無期限の試行を続けている組織はほとんどありません。

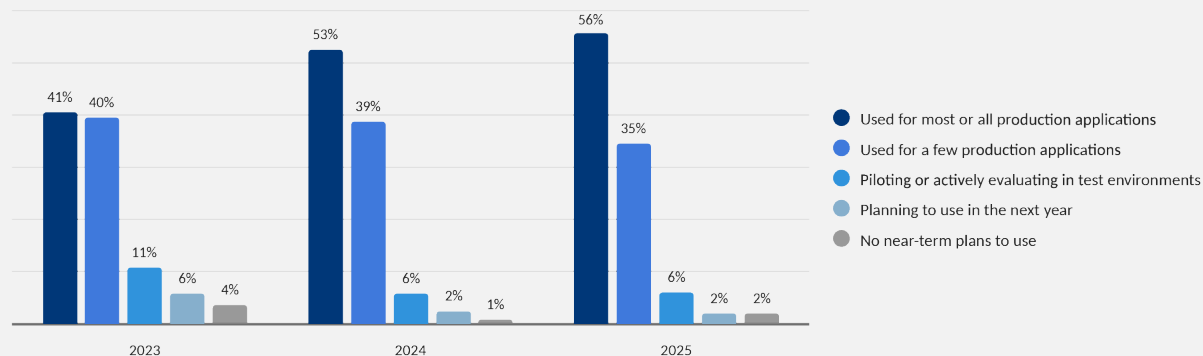
図7に示すように、2025年の最大の課題は「開発チームにおける文化的な変革」(47%)であり、次いでトレーニングの不足(36%)とセキュリティ(36%)が続きます。これは、セキュリティや複雑さといった技術的な課題が主流であった2023年からの変化を示しています。CRAなどの新たな規制が導入されるなか、セキュリティは今後も長年にわたって重要であり続けるでしょう。

文化的な抵抗は、組織全体でさまざまな形で現れる可能性があります。開発者は、コンテナがシンプルなアプリケーションに不必要な複雑さをもたらすという懐疑的な見方を示したり、Kubernetesが本番環境に対応できるかどうかを疑問視したりすることがあります。運用チームは、開発者のおもちゃだと思われるものへの抵抗感を示し、コンテナ化されたシステムのトラブルシューティングへの懸念を表明します。マネジメント層は、機能開発が妨げられることによるコスト増や、専門知識への依存を懸念しています。

図6

コンテナの利用状況

あなたの組織内でコンテナはどのように活用されていますか？(1つ選択)



2023~2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q19、Q20、サンプルサイズ=522、408、365、2024年および2025年はQ9とQ10、2023年はQ14に基づきエンドユーザー組織を対象に表示、DKNS除外

図7

コンテナ利用における課題

コンテナの利用/デプロイメントにおける課題は何ですか？(該当するものをすべて選択)



Top three challenges in 2024

- 1 Cultural changes
- 2 CI/CD
- 3 Lack of training

Top three challenges in 2023

- 1 Security
- 2 Complexity
- 3 Monitoring

2023~2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q21、Q22、サンプルサイズ=477、373、351、総言及数=1,720、1,425、1,312、2024年および2025年はQ9とQ10、2023年はQ14に基づきエンドユーザー組織を対象に表示、DKNS除外

“Kubernetes is boring” as the highest praise

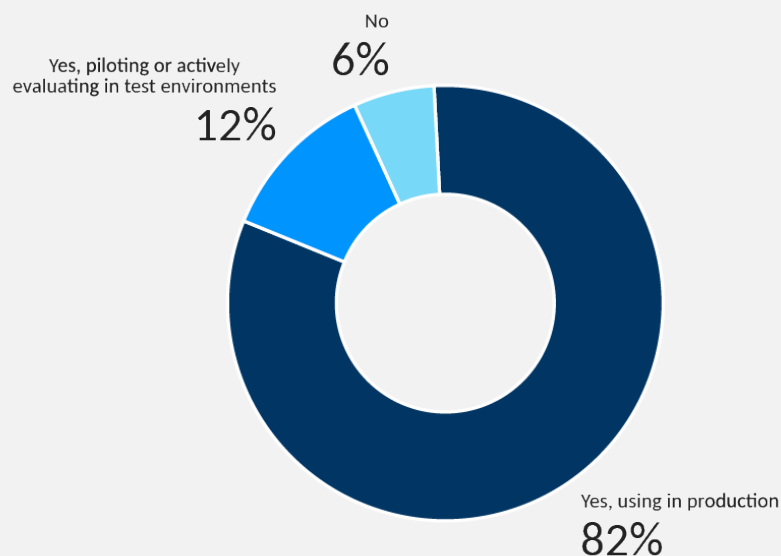
コンテナ ユーザーの中で、2025年に本番環境でKubernetesを使用している割合は82%に達し、2023年の66%から増加しています(図8)。これはコンテナ エコシステム内でのほぼ普遍的な採用を示しています。Kubernetesを「退屈」と表現することは、最高の賛辞としてこの言葉を使っています。技術において退屈とは、予期しない障害のない信頼性、十分に理解され文書化された動作による予測可能性、エッジケースが発見され対処された成熟度、そしてリリースのたびにAPIが壊れることのない安定性を意味します。

この2年間での増加は、KubernetesがAPIを安定させながら非推奨機能を削除し、主要クラウド プロバイダーが機能の同等性を達成し、Helmチャートとオペレーターがアプリケーションのデプロイメントを容易にし、CRDエコシステムが成熟してきたという技術の成熟を反映しています。Kubernetesが勝利したのは、標準的な段階に達し、エコシステム、知識、ツールの面で代替手段が太刀打ちできないネットワーク効果を持つに至ったためです。

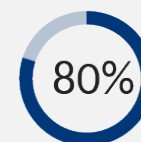
図 8

Kubernetesの利用状況

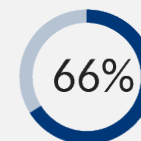
あなたの組織はKubernetesを使用していますか？(1つ選択)



% of Kubernetes users in 2024



% of Kubernetes users in 2023



2023~2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q22、Q23、サンプル サイズ=477、373、351、2024年および2025年はQ9とQ10、2023年はQ14に基づきエンドユーザー組織を対象に表示、DKNS除外

WebAssembly still waiting for the inflection point

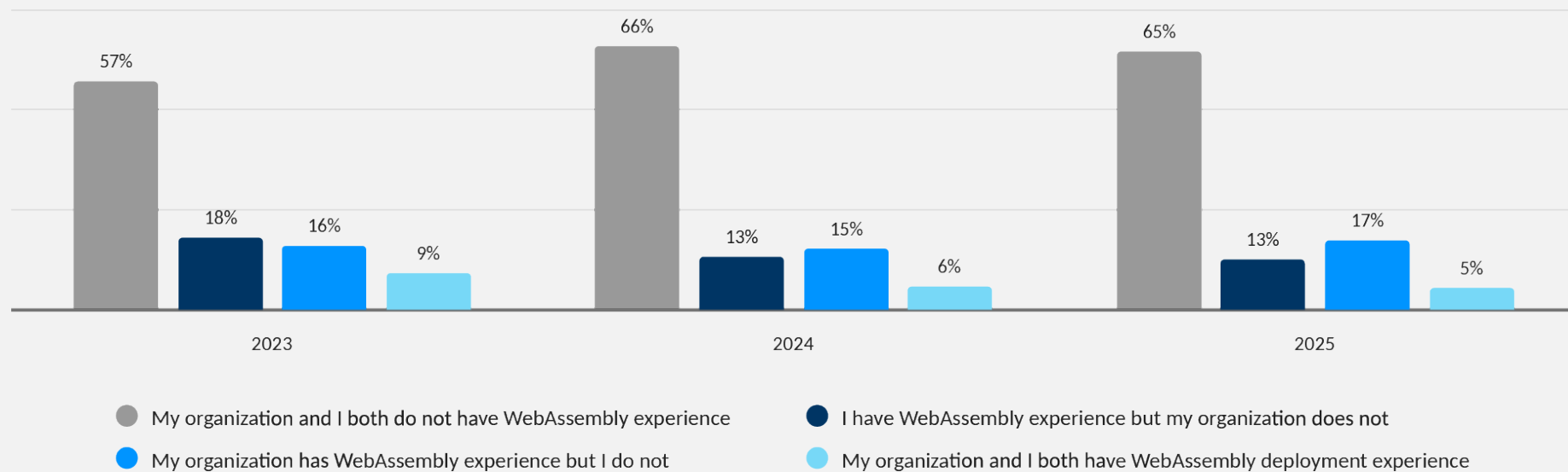
3年間を通じて、組織の約65%がWebAssemblyの経験がないと一貫して報告しており、2025年に完全なデプロイメント経験を持つのはわずか5%です(図9)。これは、WebAssemblyがクラウドネイティブ環境でいまだ変曲点を迎えていないことを示しています。

WebAssemblyは、言語に依存しない特性、ネイティブに近いパフォーマンス、サンドボックス化されたセキュリティ、ポータビリティ、そして小さなフットプリントといった魅力的な利点を提供します。理論上、Wasmはコールドスタートの高速化、密度の向上、セキュリティの改善により、多くのワークロードでコンテナを置き換える可能性があります。

図9

WebAssemblyの採用状況

あなたまたはあなたの組織でWebAssemblyを使用したアプリケーションをデプロイしたことがありますか？(1つ選択)



2023~2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q37、Q39、Q43、サンプル サイズ=988、403、347、DKNS除外

Cloud native maturity profiles

組織がクラウドネイティブの取り組みのどの段階にいるかをより深く理解するために、クラウドネイティブの採用レベルに基づいて組織を分類し、4つの異なる成熟度プロファイルを導き出しました。

- **クラウドネイティブ エクスプローラー(組織の8%):** クラウドネイティブの技術を使い始めた段階です。これらの組織はコンテナと基本的なデプロイメントを試験的に利用しています。
- **クラウドネイティブ アダプター(32%):** 一部の開発およびデプロイメントにクラウドネイティブを活用している段階です。これらの組織は特定のプロジェクトやチームへの選択的な適用にとどまっています。

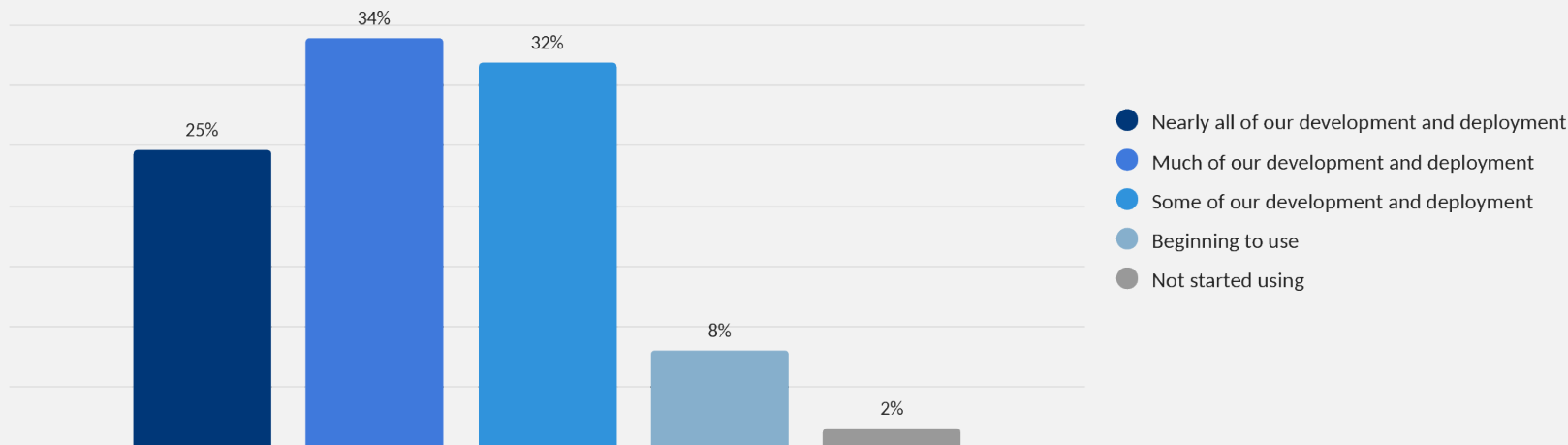
- **クラウドネイティブ プラクティショナー(34%):** 開発およびデプロイメントの多くにクラウドネイティブを活用している段階です。これらの組織はほとんどの取り組みにわたって主流の採用が進んでいます。
- **クラウドネイティブ イノベーター(25%):** ほぼすべての開発およびデプロイメントにクラウドネイティブを活用している段階です。これらの組織は包括的な組織全体の変革を達成しています。

この調査はクラウドネイティブ採用における成熟度の進行モデルを明らかにしています。クラウドネイティブ技術の活用度に基づき、組織が「エクスプローラー」から「イノベーター」に進むにつれ、より高度なプラクティスとツールを体系的に採用していくことを示しています。これは、クラウドネイティブの成熟度が単にコンテナを実行することにとどまらず、現代的な開発プラクティスのエコシステム全体を取り入れることでもあるということを示しています。

図 10

クラウドネイティブの採用状況

あなたの組織はどの程度クラウドネイティブの技術を採用していますか？(1つ選択)



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q15、サンプル サイズ=386、Q9およびQ10に基づきエンドユーザー組織を対象に表示、DKNS除外

Cloud native explorers

クラウドネイティブ エクスプローラーは今や例外であり、組織の8%にとどまっています(図10)。図11に示すように、大企業(従業員5,000人以上が45%)の比率が高いことは、規模が複雑さをもたらすことを示唆しています。大企業に偏っているという実態は、多様な技術スタックにまたがる数千のアプリケーション、数十年にわたって蓄積された技術的負債、広範な評価を必要とするリスク回避的な文化、そして分散した意思決定が、これらの組織における採用を遅らせていることを示しています。これらの組織は学習モードにあり、クラウドネイティブ技術に紐付いた収益はわずかです。平均10%という数字は、クラウドネイティブがビジネスの根幹ではなく試験的な取り組みであり、従来のシステムが依然として収益を生み出していることを示しています。

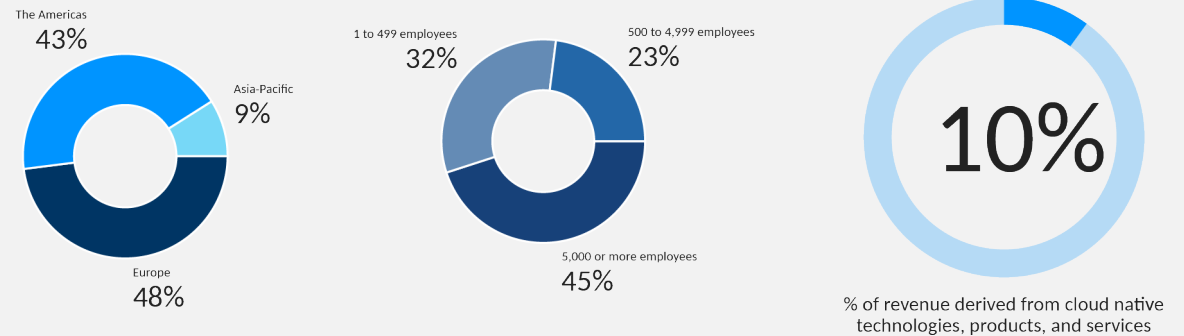
Cloud native adopters

アダプターは初期の拡大フェーズにあります。クラウドネイティブから得られる平均収益はわずか26%であり、これらの組織が専門知識をさらに商業化する前に内部の能力をまだ構築中であることを示しています(図12)。

地域別分布では欧州が58%でトップを占め、次いで南北アメリカが29%、アジア太平洋が13%となっています。収益の割合が低いことは、クラウドネイティブワークロードが本番環境ではなく開発・ステージング環境にとどまっていること、内部プラットフォームが構築中でまだ収益を生み出していないこと、そして移行が進行中で従来のシステムが依然として主流であることを反映しています。

図 11

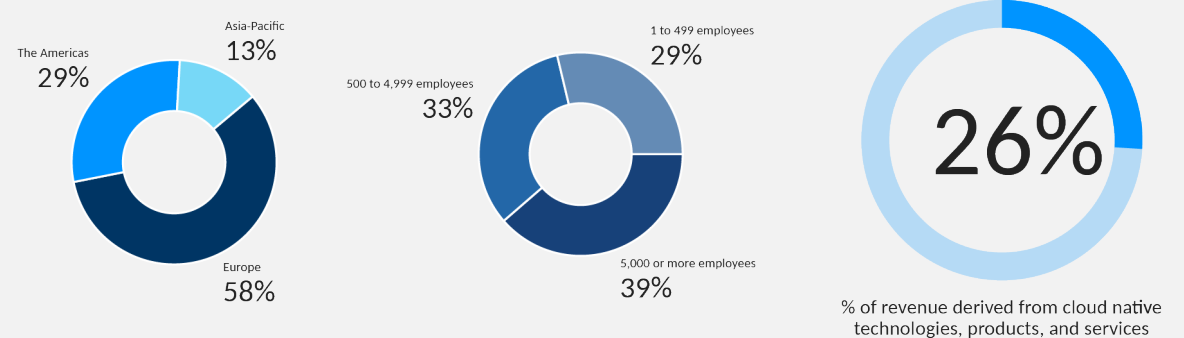
クラウドネイティブ エクスプローラー クラウドネイティブ コンピューティングの技術を使い始めた組織



2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q12、Q13、Q14をQ15別に集計、サンプル サイズ=31
(クラウドネイティブの技術を使い始めた組織)

図 12

クラウドネイティブ アダプター 一部の開発にクラウドネイティブ コンピューティングの 技術を活用している組織



2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q12、Q13、Q14をQ15別に集計、サンプル サイズ=123
(一部の開発にクラウドネイティブを活用している組織)

Cloud native practitioners

この成熟度レベルの組織は、新規開発においてクラウドネイティブをデフォルトとして扱い、プラットフォーム エンジニアリング チームがセルフサービス機能を提供し、GitOpsワークフローをチーム全体の標準として使用しています。図13に示すように、クラウドネイティブ技術から得られる平均収益は35%であり、高度な採用がビジネスモデルの進化と相関していることを示しています。この収益の変曲点は、本番ワークロードの大半がクラウドネイティブ インフラストラクチャー上で稼働し、新製品がクラウドネイティブ ファーストで構築され、第1層アプリケーションのレガシー移行がほぼ完了していることを示唆しています。また、メトリクス、ログ、トレースによる包括的なオプザバビリティの維持、アドミッション コントローラーによるセキュリティ ポリシーの自動化、環境をまたいだマルチクラスター デプロイメントの運用、そして災害復旧手順の定期的なテストも行っていると考えられます。

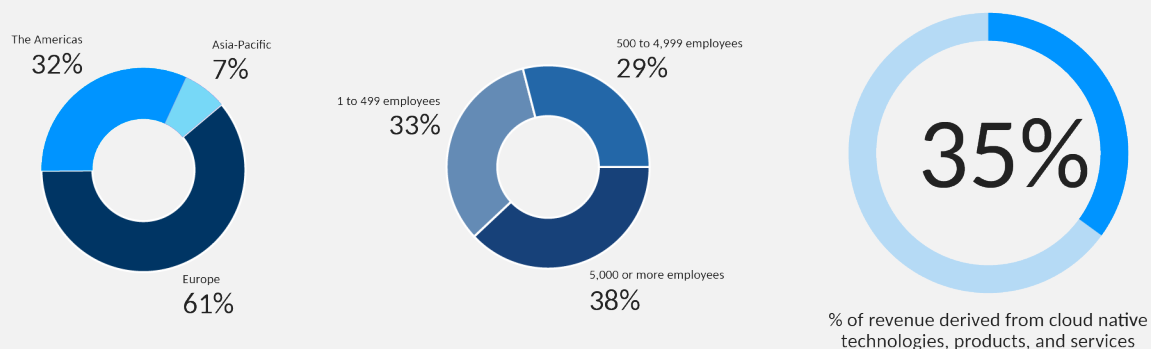
Cloud native innovators

従業員1~499人の中小企業がイノベーターカテゴリーの55%を占めており、俊敏性の優位性を示しています(図14)。収益の半分以上がクラウドネイティブ技術から得られています。これは、移行すべきレガシー インフラストラクチャーが存在しないこと、技術文化がDevOpsのDNAを持つエンジニアリング主導であること、小規模チームが大企業よりも速く変革できること、そして競争するために経済的な必要性からインフラストラクチャーの効率化が求められるといったスタートアップの優位性を示している可能性があります。収益の過半数を占めていることは、クラウドネイティブが試験的な取り組みではなく中核インフラストラクチャーであること、ビジネス モデルがクラウドネイティブの機能に依存していること、そして競争優位性がインフラストラクチャーの成熟度およびクラウドネイティブイノベーションから生まれていることを示しています。

図 13

クラウドネイティブ プラクティショナー

開発の多くにクラウドネイティブコンピューティングの技術を活用している組織

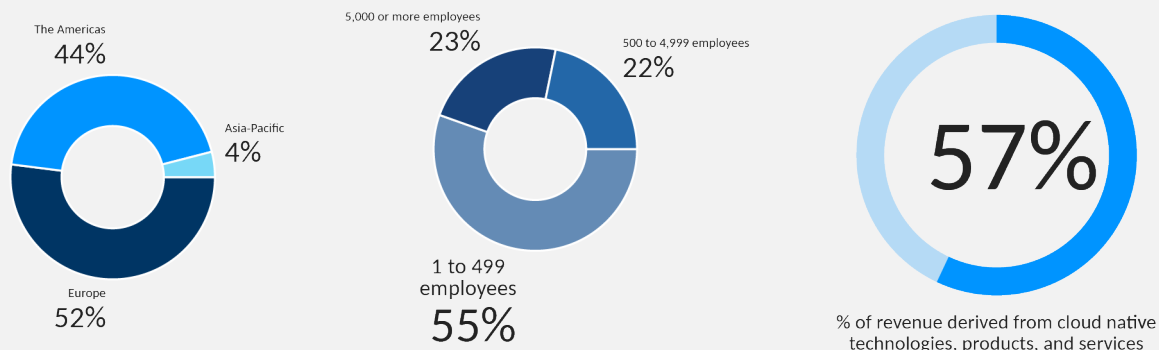


2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q12、Q13、Q14をQ15別に集計、サンプル サイズ=131
(開発の多くにクラウドネイティブを活用している組織)

図 14

クラウドネイティブ イノベーター

ほぼすべての開発にクラウドネイティブコンピューティングの技術を活用している組織



2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q12、Q13、Q14をQ15別に集計、サンプル サイズ=95
(ほぼすべての開発にクラウドネイティブを活用している組織)

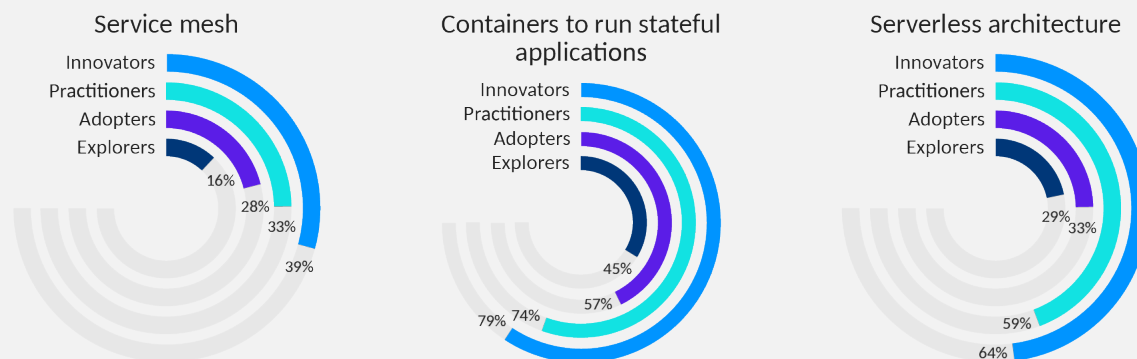
Technology roadmap and release practices

高度な技術には基盤となる成熟度が必要です。イノベーターはエクスプローラーと比べて、本番環境でサービスメッシュを実行している可能性がほぼ3倍です。また、ステートフルコンテナとサーバーレスは成熟した組織での採用率が高くなっています。開発速度は成熟度レベル間の明確な差別化要因です。イノベーターは根本的に異なるペースで運用しており、エクスプローラーやアダプターがまだ到達していない水準でコードのチェックインやデプロイメントの自動化を行っています。

データは、組織がエクスプローラーからイノベーターへと進むにつれて、より高度なプラクティスとツールを体系的に採用していくことを示しています(図15)。技術の採用は成熟度に連動しており、より成熟した組織はステートフルコンテナ(イノベーターでは79%)、サーバーレス(64%)、サービスメッシュ(39%)などのコア技術を普遍的に採用しています。開発速度も成熟度に比例して向上しており、イノベーターは1日に複数回コードをチェックインし(74%)、毎日リリースを実施し(41%)、ほとんどのデプロイメントを自動化しています(59%)。これらはエクスプローラーがほとんど取り組んでいないプラクティスです(図16)。

図 15

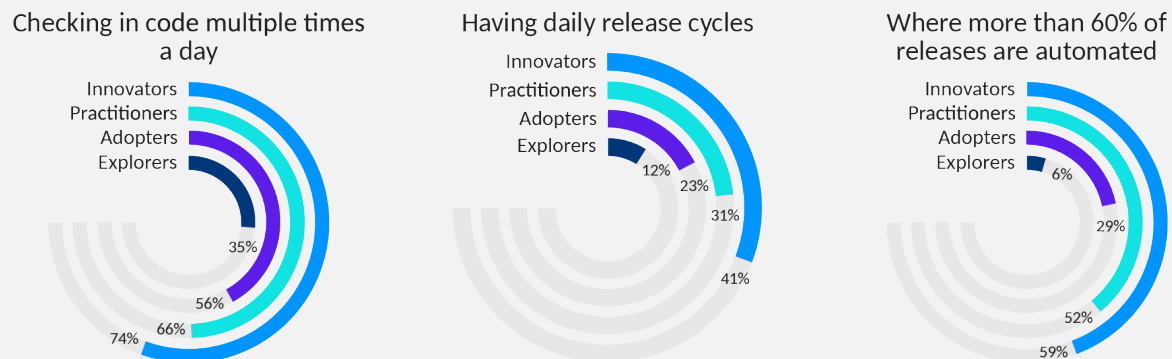
テクノロジー ロードマップ 本番環境で運用している組織の割合



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q51~53をQ15別に集計、サンプルサイズ=380、Q15はエンドユーザー組織のみを対象に表示

図 16

コード、リリース サイクル、および自動化 組織の割合



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q56~58をQ15別に集計、サンプルサイズ=380、Q15はエンドユーザー組織のみを対象

GitOps and CI/CD

図17に示すように、GitOpsは高度なクラウドネイティブの成熟度を示しています。エクスプローラーでは採用率がゼロである一方、イノベーターの58%がGitOps準拠のデプロイメントを運用しています。GitOpsは、広範な基盤となる取り組みを必要とする集大成的なプラ

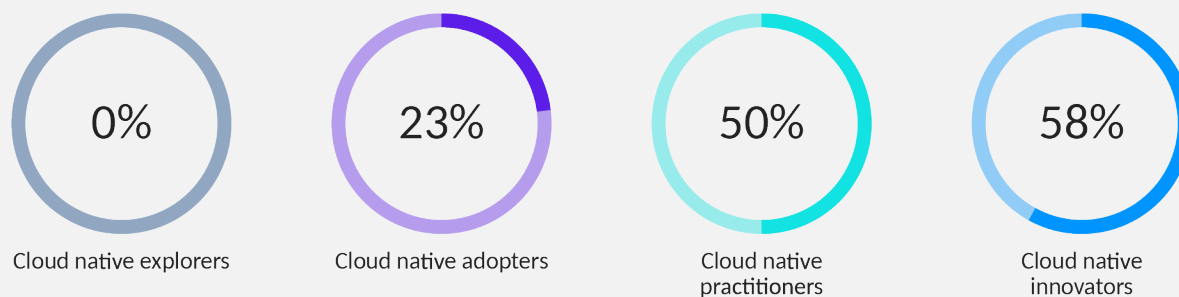
クティスです。

CI/CDはクラウドネイティブの成熟度への入り口です(図18)。取り組みを始めたばかりの組織でも42%が採用しており、イノベーターの間ではほぼ普遍的(91%)となっており、クラウドネイティブのツールキットの中で最も基本的なプラクティスと言えるかもしれません。

図17

GitOpsの原則

デプロイメントのプラクティスとツールの多くまたはすべてがGitOpsの原則に準拠している組織の割合

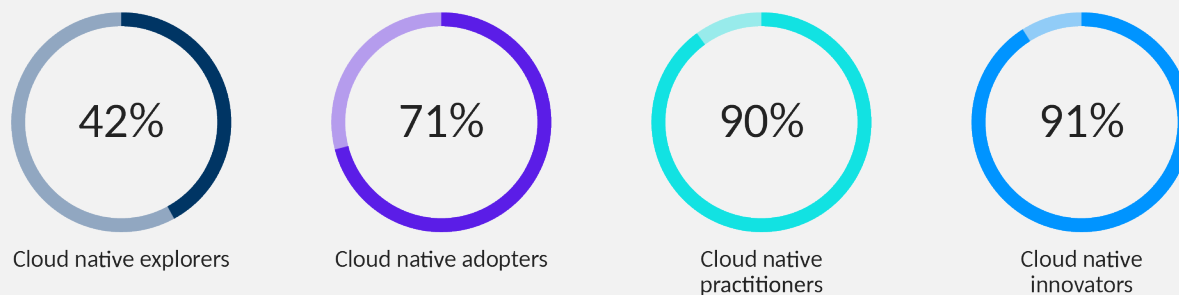


2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q59をQ15別に集計、サンプル サイズ=380、Q15はエンドユーザー組織のみを対象に表示

図18

CI/CDツール

パイプラインを管理するために本番環境でCI/CDツールを使用している組織の割合



2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q60をQ15別に集計、サンプル サイズ=380、Q15はエンドユーザー組織のみを対象に表示

CNCF Projects

Graduated projects

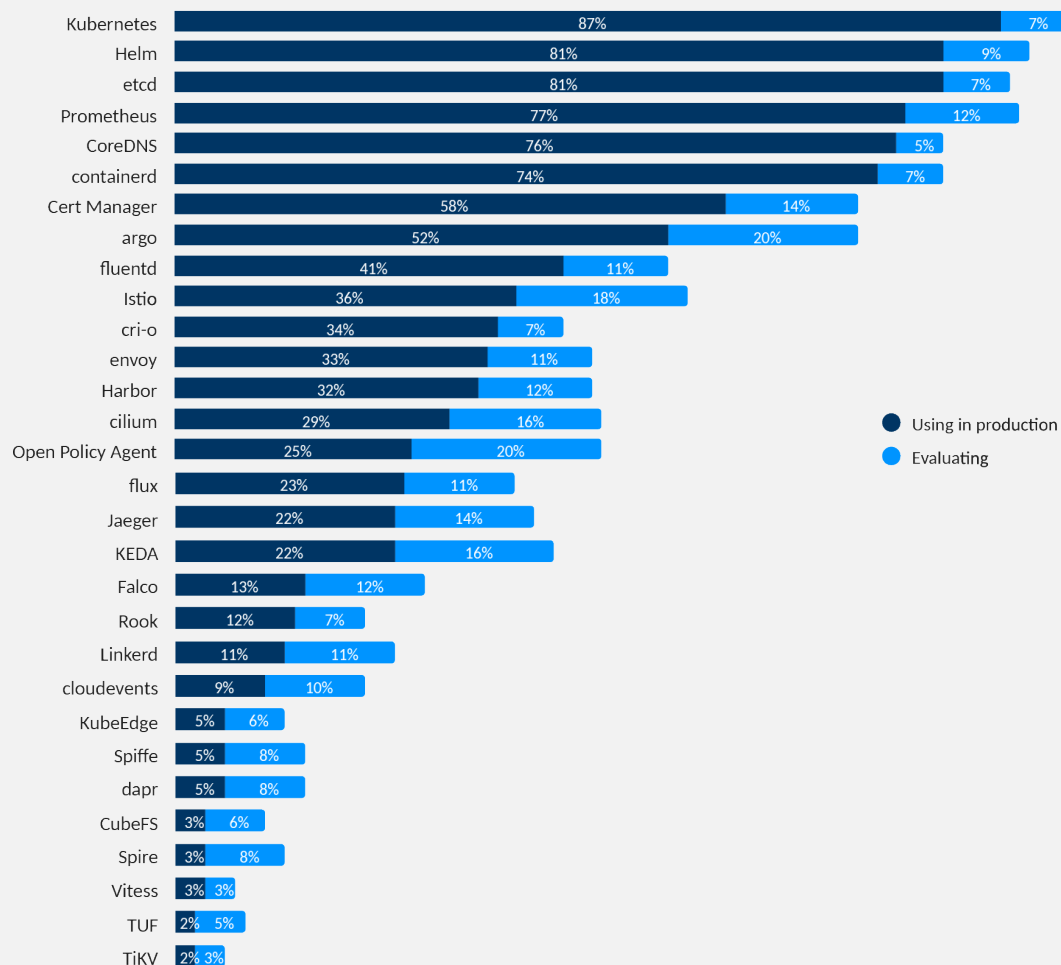
CNCFの卒業プロジェクトは、クラウドネイティブエコシステムの中で最も成熟した本番環境対応の技術を表しています(図19)。これらのプロジェクトは、広範な採用、強固なガバナンス、および継続的な貢献パターンを実証しています。データは採用の階層構造を明らかにしており、Kubernetes、Helm、etcdなどの基盤インフラストラクチャープロジェクトが本番環境でのほぼ普遍的な利用(81~87%)を達成しています。より新しいまたはより特化したプロジェクトは採用率が低いものの、成長を続けています。「評価中」の割合は継続的な関心と将来の成長可能性を示しており、特にKEDA(16%が評価中)、Open Policy Agent(20%)、Argo(20%)などの新興プロジェクトにおいて顕著です。

コアのオペラビリティとセキュリティのプロジェクトは、強固ながらも多様な採用状況を示しています。Prometheusは本番環境での利用率77%、評価中12%に達し、CoreDNSは76%、評価中5%、containerdは74%、評価中7%となっています。これらのツールはクラウドネイティブインフラストラクチャーの標準的なコンポーネントとなっています。Cert Managerは本番環境での利用率58%、Argoは52%であり、証明書管理とGitOpsワークフローに関する特定のユースケースで確固たる採用を示しています。fluentdが41%、Istioが36%、cri-oが34%、Envoyが33%、Harborが32%といったプロジェクトは、特定のアーキテクチャパターンや各カテゴリ内の代替手段として使用されることを反映した、より特化した採用パターンを示しています。

図 19

CNCFの卒業プロジェクト

以下の卒業CNCFプロジェクトのうち、あなたの組織が本番環境で使用または評価中のものはどれですか？(1つ選択)



2025年版CNCFアニュアル サurvey、Q32、サンプル サイズ=395~596、DKNS除外

Incubating projects

CNCFのインキュベーション プロジェクトは、実用性は実証されているものの、卒業プロジェクトほどの広範な採用にはまだ至っていないクラウドネイティブインフラストラクチャー技術の次世代を代表しています(図20)。これらのプロジェクトは新たなニーズに対応し、エコシステムのギャップを埋め、普遍的な課題よりも特定のユースケースを対象とすることが多いです。データは幅広いスペクトラムを示しており、本番環境での利用率が50%を超える卒業間近のプロジェクトから、一桁台の採用にとどまる初期段階のインキュベーションまでさまざまです。

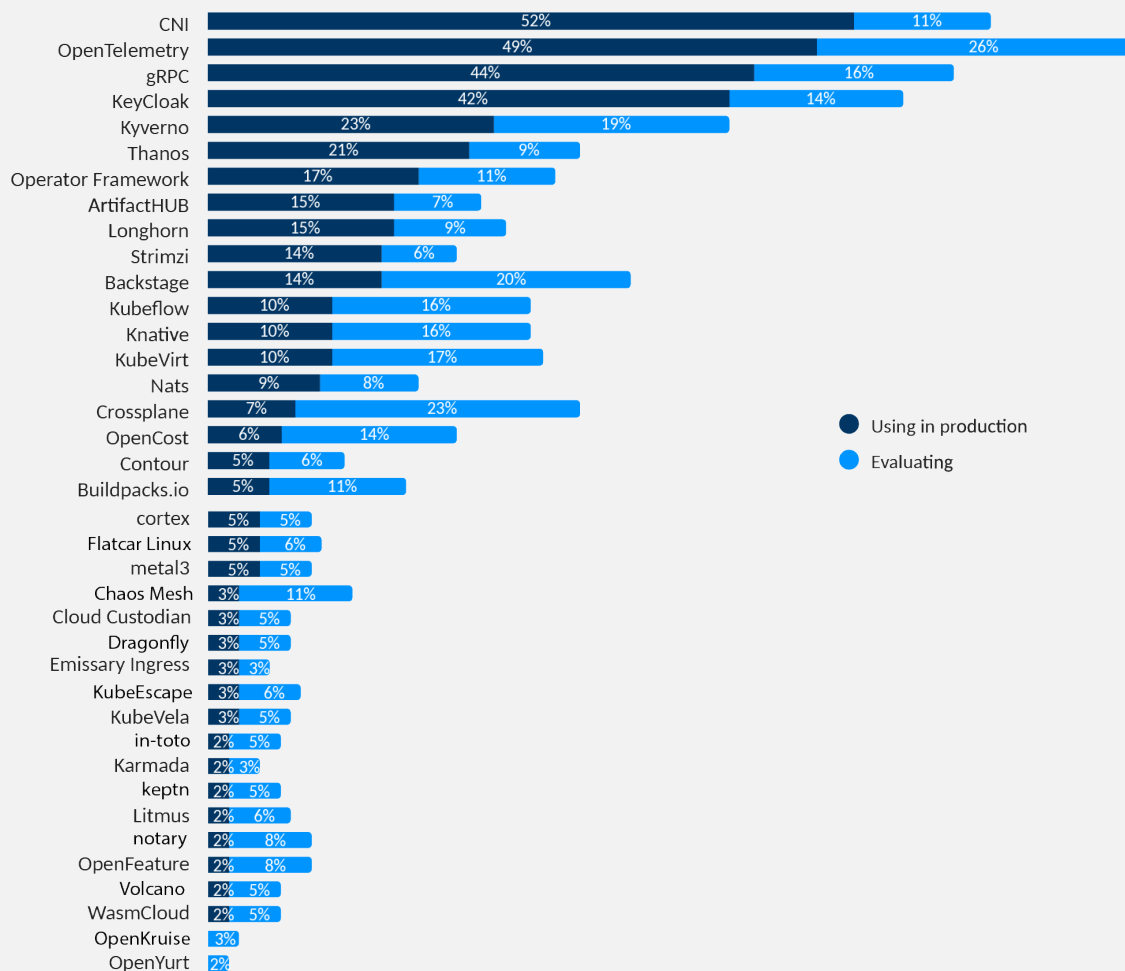
主要なインキュベーション プロジェクトとして、CNIは本番環境での利用率52%を達成しており、Kubernetesのネットワークにおける重要な役割を示しています。OpenTelemetryは本番環境での利用率49%、評価中26%に達しており、組織がこの新興標準への移行を進めるなか、オペザバビリティの分野で強い勢いを示しています。gRPCは44%、KeyCloakは42%であり、それぞれリモートプロシージャコールとアイデンティティ管理の分野で確固たる採用を示しています。Operator Framework、Thanos、Crossplaneなどのプロジェクトは、組織がKubernetesの運用とマルチクラウド戦略を成熟させるにつれて、採用が拡大していることを示しています。

新興プロジェクトは、その特化した性質や開発の初期段階を反映した多様な採用状況を示しています。Chaos Meshは本番環境での利用率3%に対して評価中が11%であり、カオス エンジニアリングのプラクティスへの関心の高まりを示しています。KubeVirt、Backstage、Keptnなどのプロジェクトは、本番環境での利用率は一桁台にとどまっているものの、評価中の割合は高く、それぞれ仮想マシン管理、開発者ポータル、アプリケーション ライフサイクル オーケストレーションという特定の分野で支持を集めつつあることを示しています。

図 20

CNCFのインキュベーション プロジェクト

以下のインキュベーションCNCFプロジェクトのうち、あなたの組織が本番環境で使用または評価中のものはどれですか？(1つ選択)



2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q33、サンプル サイズ=395~502、DKNS除外

Conclusion

組織の98%が採用するなか、議論はクラウドネイティブを採用するかどうかから、その価値を最大化する方法へと移行しています。AIワークロードとクラウドネイティブ インフラストラクチャーの融合は2025年の最も重要な動向を示しており、組織の66%がKubernetes上で生成AIを実行しています。しかし、AIの野心とデプロイメントの現実との間のギャップは依然として歴然としています。組織がAIモデルの試験的利用に急ぐ一方で、毎日デプロイメントを実現しているのはわずか7%にとどまり、ほとんどの組織はモデルをトレーニングするのではなく利用する側にいます。

エクスプローラーからイノベーターへの進行は予測可能なパターンをたどっており、GitOpsの採用状況が組織の成熟度の信頼できる指標として機能しています。GitOpsの採用率が0%の組織は初期段階にとどまっており、58%に達した組織は包括的な変革を達成しています。この予測可能性は、クラウドネイティブの取り組みを前進させようとする組織に対してロードマップを提供しています。

オープンソース インフラストラクチャーの持続可能性は重要な懸念事項として浮上しています。AIワークロードが機械主導の自動化

された利用によってシステムに負荷をかけるなか、このインフラストラクチャーを支えるオープンソース プロジェクトは前例のないプレッシャーに直面しています。クラウドネイティブの恩恵を受けている組織は、受動的な利用にとどまらず、資金提供、貢献、そして責任あるリソース利用を通じた積極的な管理へと移行しなければなりません。そうしなければ、重要なインフラストラクチャーが負荷のもとで劣化するコモنزの悲劇に陥ることになります。

今後を見据えると、クラウドネイティブはもはや目的地ではなく、基盤となっています。2025年以降に成功する組織は、インフラストラクチャーを第一級の能力として扱い、技術の採用と並行して組織の変革に投資し、持続可能なインフラストラクチャーには持続可能な資金調達モデルが必要であると認識する組織です。サーベイのデータは、現在の採用状況のスナップショットを提供するだけでなく、インフラストラクチャーへの依存が高まる世界においてリーダーとフォロワーを分けるものを示しています。

クラウドネイティブが退屈なインフラストラクチャーとなるにつれ、競争優位性はその基盤の上に信頼性が高く、スケーラブルで、持続可能なシステムを構築できる組織へと移行していきます。

Methodology

本調査は、2025年9月にLinux Foundation Researchおよびそのパートナーが実施したウェブサーベイに基づいています。サーベイの目的は、コンテナ、Kubernetes、およびその他のクラウドネイティブの採用動向に関する組織の見解を把握することでした。本セクションでは、データの分析方法に関する調査手法と背景、およびその後回答者の属性を示します。

調査の観点から、データの品質を高く保つことが重要でした。回答者が所属する組織を代表して正確に質問に答えるのに十分な職務経験を持つことを確認するため、広範な事前スクリーニング、サーベイのスクリーニング質問、およびデータ品質チェックを通じてデータ品質に対処しました。

業界固有の企業、ITベンダーおよびサービスプロバイダー、非営利組織、学術機関、および政府機関からサーベイデータを収集しました。回答者はさまざまな垂直産業およびあらゆる規模の企業にわたり、南北アメリカ、欧州、アジア太平洋、中東およびアフリカを含む複数の地域からデータを収集しました。

2025年版CNCFアニュアルサーベイは65の質問で構成されており、スクリーニング、回答者の属性、クラウドネイティブコンピューティング、コンテナ、Kubernetes、CNCFプロジェクト、およびその他6つのトピック領域を取り扱いました。サーベイの全体的な設計を表1に示します。

表 1
サーベイの設計

Section	Questions	Question categories	Who answers the questions
Demographics	Q1 – Q14	Tell us about yourself & the organization you work for	All respondents except unemployed students
Cloud Native	Q15 – Q19	Cloud and cloud native computing at your organization	For orgs who are end-users, SIs or consultants
Containers	Q20 – Q22	Container use	For orgs who are end-users, SIs or consultants
Kubernetes	Q23 – Q31	Kubernetes use, follow-up, & autoscaling	For orgs who are end-users, SIs or consultants
CNCF Projects	Q32 – Q34	CNCF projects	All respondents
Security	Q35 – Q36	Security and compliance	All respondents
Observability	Q37 – Q38	Observability	All respondents
Generative AI	Q39 – Q42	Generative AI, self-hosting, Kubernetes use	All respondents
WebAssembly	Q43 – Q49	WebAssembly	All respondents
Tech Roadmap	Q50 – Q53	Technology roadmap	All respondents
Infrastructure	Q54 – Q55	Infrastructure platforms	All respondents
CI/CD	Q56 – Q61	Code, release cycles, and automation	All respondents
Students only	Q62 – Q65	Student only technology questions	Students only

サーベイのスクリーニングでは、サーベイの一部またはすべての質問に答えるのに十分な経験を持つ回答者を選定するために、3つの変数を使用しました。

- クラウドネイティブ技術に精通していること
- 人間であると識別されること
- フルタイムまたはパートタイムで雇用されていること

合計628人の回答者がサーベイを完了しました。このサンプル サイズの誤差範囲は、信頼水準90%において±3.3%でした。データは主に、地理的地域、企業規模、組織の種類、およびクラウドネイティブ技術の組織的な採用度によって分類されました。

回答者はサーベイのほぼすべての質問に回答することが求められましたが、回答できない場合に備えた措置が講じられていました。これは、すべての質問の回答リストに「わからない、または確信が持てない」(DKNS)という選択肢を追加することで実現しています。しかし、これにより様々な分析上の課題が生じます。

一つのアプローチは、DKNSを他の回答と同様に扱い、DKNSと回答した回答者の割合を把握するというものです。このアプローチの利点は、収集されたデータの正確な分布を示せることです。このアプローチの課題は、有効な回答、すなわち回答者が質問に答えられた場合の回答の分布を歪める可能性があることです。

本レポートの一部の分析ではDKNS回答を除外しています。これはデータを年単位で比較する際に行われます。サンプル サイズとDKNS回答の割合は年によって常に異なるためです。DKNS回答を除外することで、データを正規化し、年単位の比較と成長率を正確に算出できるようにしています。

本レポートの割合の値は、四捨五入の影響により合計が正確に100%にならない場合があります。

Availability of results

LF Researchは各実証プロジェクトのデータセットおよびこの2025年版CNCFAニュアルサーベイをData.Worldで公開しています。このデータセットには、サーベイの設計書、サーベイの生データ、スクリーニングおよびフィルタリング基準、ならびにサーベイの各質問の度数分布表が含まれています。

このプロジェクトを含むLF Researchのデータセットはdata.world/thelinuxfoundationで参照できます。Linux Foundationのデータセットへのアクセスは無料ですが、data.worldのアカウントを作成する必要があります。

Respondent demographics

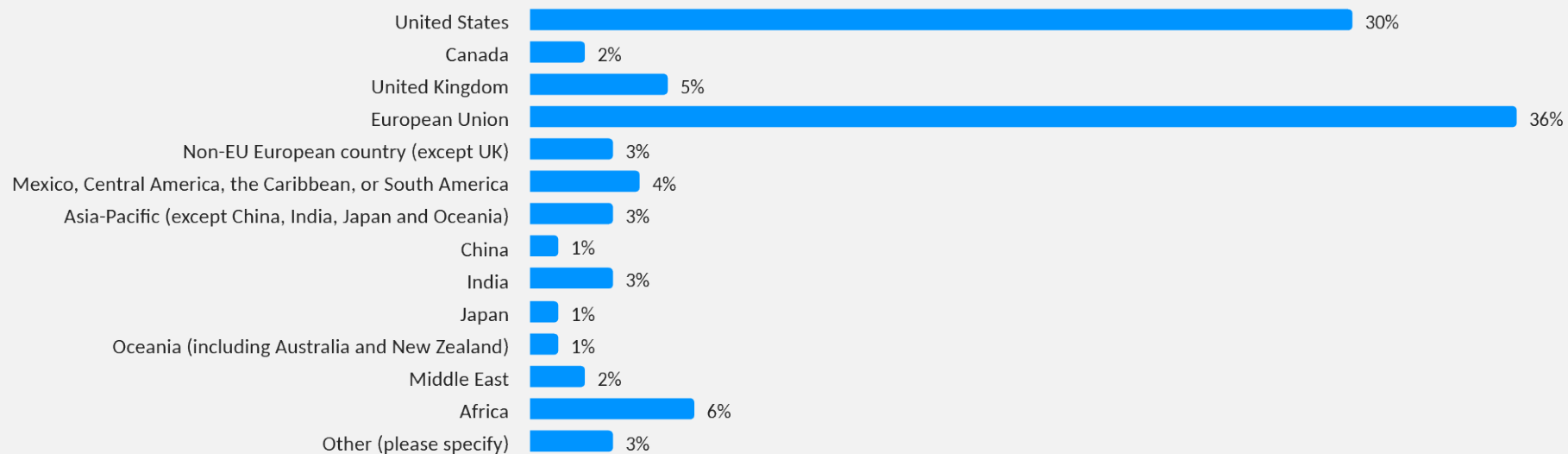
これらの属性データは、2025年版CNCFAニュアルサーベイの回答者プロファイルを示しています(図21、22、23)。元のソースデータおよび調査の度数分布については、上記のdata.worldへのアクセス方法をご参照ください

図 21

調査対象組織の地理的分布

あなたの組織の本社所在地はどこですか？(1つ選択)

What is the geographic location of your organization's headquarters? (select one)

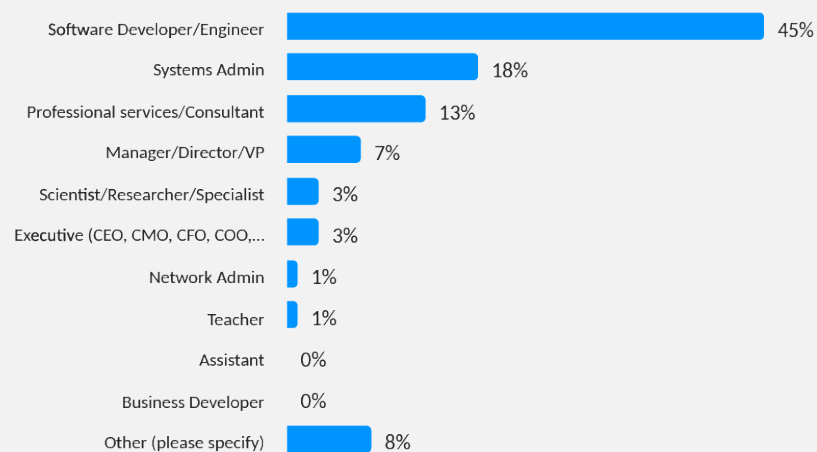


2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q12、サンプル サイズ=628

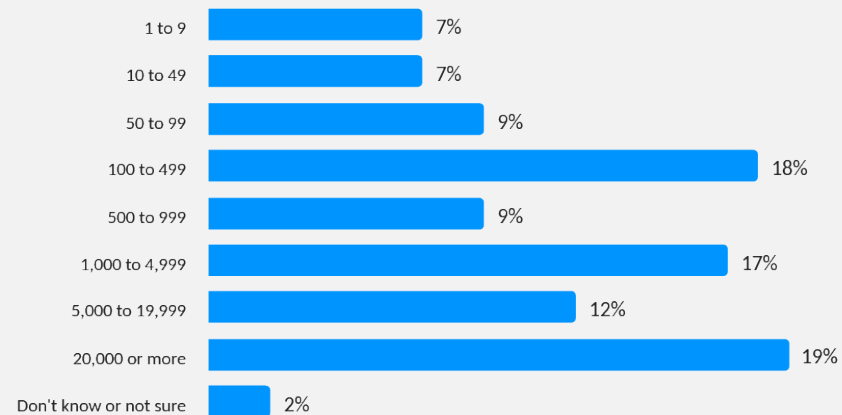
図 22

属性データ I

あなたの役割を最も正確に表す職位はどれですか？(1つ選択)



あなたの組織の全世界の従業員数はどのくらいですか？

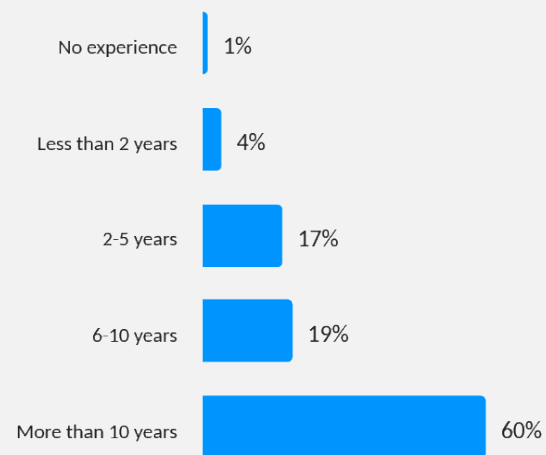


2025年版CNCFアニュアル サーベイ、Q8、Q13、サンプル サイズ=628

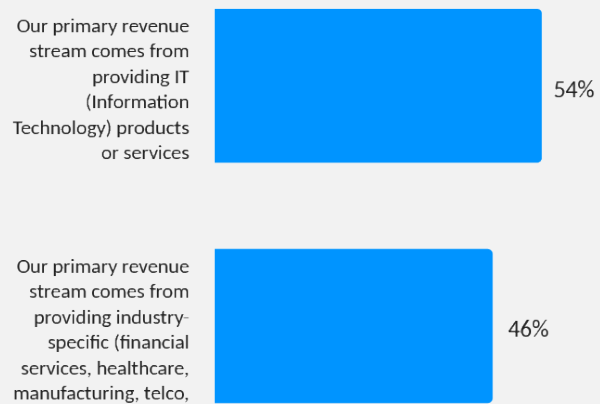
図 23

属性データ II

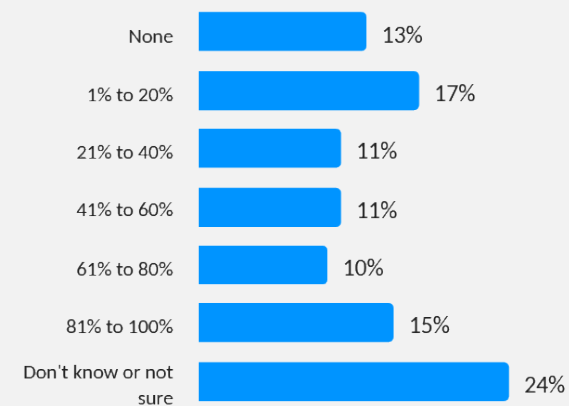
ITの職務経験は何年ですか？(1つ選択)



あなたが勤務する組織を最もよく表す選択肢はどれですか？(1つ選択)



あなたの組織の主な収益源のうち、クラウドネイティブの技術、製品、またはサービスの提供から得られる割合はどのくらいですか？(1つ選択)



2025年版CNCFAニュアル サーベイ、Q5、Q9、Q14、サンプル サイズ=628

About the authors

Adrienn Lawsonは、Linux FoundationのDirector of Quantitative Researchであり、オープンソース エコシステムを理解するためのデータ主導の取り組みを率えています。オックスフォード大学での社会データサイエンスの専門知識と、学術および政府機関での研究経験を背景に、分散型コラボレーションネットワークの分析に方法論的な厳密さをもたらしています。Linux Foundationでは、業界の垂直分野および地理的地域にわたる横断的な調査を実施するチームを率い、オープンソースの動向に関する包括的な知見を提供しています。彼女の研究は、規制コンプライアンス、AIの影響、および持続可能な資金調達モデルに関する実証的な調査を含んでいます。

また、オープンソース コミュニティ内の戦略的意思決定に資するエビデンスに基づく提言を作成しています。

Jeffrey Sicaは、CNCFのHead of Projectsであり、メンテナーのエクスペリエンス向上、コミュニティの構築、およびプロジェクトの自動化に注力しています。それ以前は、Red Hatおよびミシガン大学でクラウドネイティブ技術とCI/CDパターンに取り組んでいました。Jeffreyはアップストリームのkubernetesの貢献者であり、SIG-Contribex、SIG-Release、SIG-UIに携わっています。オープンソース開発の推進と、バーンアウトの認識および軽減に情熱を持って取り組んでいます。

Acknowledgments

サーベイに参加してくださったすべての方々に感謝します。調査プロセスのさまざまな段階に関わってくださったLinux Foundationの同僚、Chris Aniszczuk、Jonathan Bryce、Hilary Carter、Mia Chaszeyka、Anna Hermansen、Allison Price、およびLinux FoundationのCreative Servicesチームに特別な感謝を申し上げます。



クラウドネイティブ コンピューティングは、組織がパブリック、プライベート、およびハイブリッド クラウドにおいてオープンソースのソフトウェア スタックを用いてスケーラブルなアプリケーションを構築および実行できるようにします。Cloud Native Computing Foundation(CNCF)は、Kubernetes、Prometheus、Envoy を含むグローバルな技術インフラストラクチャーの重要なコンポーネントをホストしています。CNCFは業界トップの開発者、エンドユーザー、およびベンダーを結集し、世界最大のオープンソース開発者向けカンファレンスを運営しています。世界最大のクラウドコンピューティングおよびソフトウェア企業、ならびに200社以上の革新的なスタートアップを含む約800のメンバーに支えられ、CNCFは非営利組織であるLinux Foundationの一部です。詳細は www.cncf.io をご覧ください。

2021年に設立された [Linux Foundation Research](https://www.linuxfoundation.org/research/) は、オープンソースを探求し、新興技術のトレンド、ベスト プラクティス、およびオープンソース プロジェクトのグローバルな影響に関する知見を提供しています。プロジェクトのデータベースとネットワークを活用し、定量的および定性的な方法論におけるベスト プラクティスに取り組むことで、Linux Foundation Researchは世界中の組織の利益のためにオープンソースに関する知見の参照先となるライブラリを構築しています。

 <https://twitter.com/cloudnativefdn>

 <https://www.facebook.com/CloudNativeComputingFoundation/>

 <https://www.linkedin.com/company/cloud-native-computing-foundation/>

 <https://www.youtube.com/c/cloudnativefdn>

 <https://github.com/cncf>

 twitter.com/linuxfoundation

 facebook.com/TheLinuxFoundation

 linkedin.com/company/the-linux-foundation

 youtube.com/user/TheLinuxFoundation

 github.com/LF-Engineering



Copyright © 2026 [The Linux Foundation](https://www.linuxfoundation.org/)

This report is licensed under the [Creative Commons Attribution-NonCommercial 4.0 International Public License](https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/).

To reference this work, please cite as follows: Adrienn Lawson and Jeffrey Sica, "CNCF Annual Cloud Native Survey: The infrastructure of AI's future" foreword by Jonathan Bryce, The Linux Foundation, January 2026.

翻訳協力: 北村 拓也